

## 第23回連合駿台会学術賞・学術奨励賞

### 【駿台懇話会の目的】

明治大学と連合駿台会が相互の情報交換と親睦を図り、母校の教育振興と地域社会の発展に寄与することを目的とする。

### 1. 連合駿台会学術賞

【人文科学】 <sup>まじまあゆ</sup> 眞嶋亜有 (国際日本学部専任講師)

『「肌色」の憂鬱—近代日本の人種体験』

### 2. 連合駿台会学術奨励賞

【社会科学】 <sup>きむ</sup> 金ゼンマ (国際日本学部専任講師)

『日本の通商政策転換の政治経済学：  
FTA/TPPと国内政治』

【自然科学】 <sup>いがらしゆき</sup> 五十嵐悠紀 (総合数理学部専任講師)

『クラフトを対象とした  
インタラクティブデザインに関する研究』



No. 332 平成29年3月15日発行  
発行・編集 連合駿台会  
発行人 広報委員長・齋藤柳光  
編集人 事務局・矢嶋まゆ子  
〒101-0052 千代田区神田小川町三―一二二  
明治大学「紫紺館」内  
電話 (〇三) 三二九六―四七四七  
印刷 有限会社 美創



〈左から〉柳谷孝理事長、五十嵐悠紀先生、眞嶋亜有先生、田村駿会長、金ゼンマ先生、土屋恵一郎学長

## 連合駿台会学術賞・学術奨励賞を授与

## 新春の駿台懇話会（一月例会）

平成二十九年最初の連合駿台会例会（駿台懇話会）を、一月十八日（水）十七時半より、明治大学アカデミーコモン二階「ビクトリーフロア暁の鐘」で開催しました。

田村会長の挨拶に続いて、学術賞一人および学術奨励賞二人の名前およびその選考経過が発表されました。そして学術賞受賞者の眞嶋亜有先生（国際日本学部専任講師）の受賞記念講演がありました。

講演の要旨は以下の通りです。

\*

## 自己否定を伴わないグローバル化を

―肌色の憂鬱をめぐる終焉と―

日本人の精神構造―

## 御礼の挨拶

御紹介いただきました国際日本学部専任講師の眞嶋亜有と申します。

このたびは拙著『肌色』の憂鬱―近代日本の人種体験』（中公叢書、二〇一四年）で連合駿台会学術賞という荣誉にあずかり、御推薦いただきました国際日本学部の鹿島茂先生、選考に関わって下さいました諸先生方、運営等に携わって下さいました事務の方々、そして連合駿台会の皆さまに心から深く感謝

申し上げます。

また、土屋学長におかれましては、拙著刊行直後の二〇一四年夏に、拙著を書店で見つけて下さり、購入いただいたうえにお読み下さいましたこと、明治大学に着任してから二年後の昨年に初めて知りまして、大変感激いたしました。この場をお借りして改めて心より深く感謝申し上げます。本日は三十分という短い時間ではありますが、私が拙著を通じて世に問いたかったこと、その現代的意味、そして今後の抱負などを述べさせていたきたたく存じます。

## 近代日本の人種体験とは何であったのか

この世に生を享けて以来、人はあらゆる差別化とともに自己を形成してきました。その多くは、学校などの集団生活でのさまざまな体験から、受験、収入、地位、名誉といった社会的価値基準ですが、他者との差別化は、自己実現と社会的承認を図るうえでひとつの尺度となり、自己確認の手段となります。いうなれば、人は「差別」されることを自ら求め、努力してきました。しかし、身体はそうはいきません。顔や身体は自らの努力で獲得できる領域ではなく、それでいて人が生涯逃れられない可視的運命です。なかでも、人の力では永遠に変えられない側面がある。その最たるものが「肌の色」、つまり人種の差

異ではなかったでしょうか。

近代日本にとって、「肌の色」という可視的運命をめぐる自己規定は容易ではありませんでした。なぜならば、近代日本にとって、最も重要な他者とは西洋だったからです。

明治以降、日本は、日本が日本として存続するために、「西洋化」、つまり最も重要な他者への模倣を国家存続の手段として選択しました。それは国家レベルのさまざまな制度だけではなく、衣食住から心性、そして価値観といったミクロレベルにまで及びます。

しかし、日本が日本であるための「西洋化」の現実には、乗り越えられない二つの矛盾がありました。それは、「西洋化」によっては具現化できない非西洋としての日本の自己規定、そして西洋と日本を最も明確に分かつ「人種」という宿命的差異です。

近代日本が国家として人種の差異に直面し始めたのは、日露戦争（一九〇四―一九〇五）後といえます。日露戦争の勝利は、日本に「一等国」としての国家的自尊心を与えたと同時に、西洋に人種の嫌悪と排除の感情を芽生えさせる契機となりました。

明治以降、近代日本は「西洋化」を追求し続けてきたが、西洋と同様に「文明」を獲得したかに見えた日露戦争後、唯一の非西洋として列強に参入していった日本を待ち受けていたのは、昂揚する黄禍論、パリ講和会議

における人種平等案挿入の「失敗」、米国の排日移民法制定など、西洋からの人種的排除という「身体」の限界でした。

開国以来、驚異的速度で西洋を規範にした近代国民国家の形成を果たし、非西洋の一国として、西洋列強の支配する国際政治の舞台に台頭した近代日本にとって、「人種」という「運命」は、避けることも離すことも、そして消すこともできぬ影のように、自己認識につきまとう。非西洋の「文明国」として西洋から承認を受けること、すなわち条約改正こそが国家的指針であった近代日本にとって、西洋と日本を分かち「人種」とは、きわめて厄介な問題であり、直視しがたい憂鬱な「運命」であったからです。

果たして近代日本は、「肌の色」という可視的運命をどのように体験したのか。そして、近代日本の人種体験が意味したものとは何であったのでしょうか。

### 近代日本の自己矛盾

詳しくは本書をお読みいただければと思いますが、近代日本の人種体験が意味したものは、主として三点あります。第一に、近代日本の自己矛盾です。明治以降、日本が日本であり続けるために自己選択した西洋の権威化は、それ自体、日本の自己否定と西洋への著しい心理的依存を意味しました。近代日本

は、日本が日本であり続けるために、日本を否定しなければならなかったと同時に、日本が日本である限り、日本を棄てることができることはできなかった。この自己矛盾なくして近代日本の心性は語りえません。

近代日本のナショナリズムが、常に欧化と国粋から親米と反米に至るまで、折に触れて、極端な振り子のはざままで振幅を繰り返してきた思想的パターン（型）も、すべては近代日本の自己矛盾をめぐる必然的帰結であったといえます。言い換えれば近代日本は、そういういった振幅の激しさを繰り返すことで、西洋の権威化によって生まれた近代日本の心性における空虚を補おうとしたともいえるかもしれません。この自己矛盾をめぐる心性の系譜は、本書で論じましたように、明治中期から戦後のエリート層の人種体験として如実に表れていきます。

しかし、近代日本の心性が、たとえばどれだけ西洋の権威化によって成り立っていたとしても、日本が日本である限り、どれだけ西洋を崇拜し、白人を崇拜しても、そのころの空虚を埋めることはできない。一九四五年八月十五日、近代日本は壊滅的な廃墟となつてその終焉を迎えましたが、明治以降、日本がその心性において、直視しがたくも、常に避けられずにいたこの自己矛盾は、埋めようとも埋めきれぬ空虚となつて、そのころに

残り続けたといえます。

しかし、ここで重要なことは、西洋の権威化による日本の自己矛盾は、あくまで日本が日本として存続するために選択した、積極的意味から生じた精神的結果であり、それは近代日本が国家として存続するためには不可避であったことです。

近代日本の精神構造とは、この自己矛盾にすべてが収斂されているといっても過言ではなく、この自己矛盾とその悲哀なくして近代日本のナショナリズムはもとより、心性さえも論じることができません。

西洋に対する劣等感も、アジアに対する優越感も、ともに表裏一体の強烈な優劣感情となつて、近代日本の自己認識を支えてきたのもこの心性の構造によるものといえます。脱重入欧・脱欧入亜にみられる近代日本の自己規定を考えても、その激しい優劣感情ゆえにもつ独特の不安定さは如実に示されています。言い換えれば、強烈な劣等感と強烈な優越感、常に表裏一体となつて、その心性における空虚を埋め、不安定さを安定化させようとするかのごとく均衡を取ろうとしてきた。しかし、それにもなう不安は避けられず、またそれゆえの脆さも避けることはできなかったことが、明治中期から戦後に至る人種体験とその心性の系譜から読み取れます。

そして何よりも、近代日本が急速に遂げ

て行った歴史的過程には、それと同様の精神的負荷が伴わなければ実現しえなかったこと、そしてその精神的負荷そのものが、日本人の人種意識に色濃く反映されていることが本書で扱った心性の系譜をみてもわかるのではないかと考えております。

### 自己肯定のための自己否定

第二に、本書が扱ってきた日露戦争前後から第二次世界大戦後に至るまでの約半世紀、近代日本エリート層に一貫してみられた人種意識にあったのが、自己醜悪視でした。夏目漱石から遠藤周作まで、特に西洋へ留学したエリート層のあいだには、白人に対する人種の劣等感が、自己醜悪視というかたちで顕著にあらわれていきます。

何をもって美醜とみなすかは個々人の感性にゆだねられますが、かくも歴史的に途切れることなく、自他ともに認識されるほどの日本人の醜悪視とは、一体どこから生まれたものであり、そして何を意味したのでしょうか。美醜とは客観的・主観的側面の入り混じった領域である限り、一概には言い切れませんが、日本人の自己醜悪視に最も影響力を及ぼしたものは、やはり近代以降、日本人があらゆるレベルで内在化し続けてきた自己否定にあったと考えられます。いみじくも「日本人離れした」という表現が、日本において褒め

言葉になっていることが物語るように、日本人は明治以降、西洋の権威化によって一貫して自己否定と不可分な心性の系譜をたどってきました。近代日本が、終始一貫して劣等感と優越感のはざままで揺れ動く大きな振り子のよう不安定さに苛まれてきたのも、すべては非西洋である日本の西洋の権威化による自己否定が根底にあることのあらわれであったでしょう。

しかし、さらに歴史をさかのぼれば、日本は地政学的にみても古代よりインド・中国といった中心文明の辺境に位置したために、日本の文化・文明とは、常に他の中心文明のもつ「永遠の成果」を「採用」することによってでしか、その存在を明らかにすることはできずきた「月光文明」(シュペンゲラー)であったともいわれています。

日本が歴史上、常に「優れた文化を外より受ける際の外国崇拜、自国蔑視」(和辻哲郎)が表裏一体にあつたのも、日本の発展のための外国文明の摂取が、外国崇拜および、その文明を欠いた自国に対する蔑視を伴った。その点で、日本は古代から、この自己肯定のための自己否定に苛まれる心性の系譜を歩み続けてきたといえるかもしれません。

### 「日本人であること」の不安

いわば「日本人であること」の不安(吉田健

一)とは、もともとは日本が持つこの辺境性による不安であり、歴史的にも地政学的にも常に不安を抱き続けてきた心性の系譜をもち、自己否定の精神構造を形成してきたからこそ、日本人は極度の劣等感と優越感を表裏一体にもち、その振り子の狭間で揺れ動いてきたといえます。このような不安を自己に抱き続け、また自己を否定しさえする人間が、果たして堂々たる態度をもち威厳に満ちた姿勢を対外的にみせることができるでしょうか。自己否定を内に秘めた心性を持つ者が、どれだけ卑屈になりえないといえるでしょうか。

要するに日本人の自己醜悪視には、この自己否定をめぐる心性の系譜が不可分にあつた。そして、近代以降、西洋の権威化を国家存続の唯一の手段とした日本にとって、西洋と日本を分かち人種の差異とは、変えようもないものであるにもかかわらず、またそうであるからこそ、この可視化された身体的差異に内在化された自己否定が投影されていったのでしよう。近代日本エリート層が、ことに人種の観点から自己醜悪視していったのは、最も重要な他者である西洋と日本を分かち人種の差異に強烈な不安や劣等感を覚えたからであり、また、そういった差異からくる不安を自己醜悪視することで抹消しようとした心理的過程があつたからではないでしょうか。

## 近代日本の光と影

しかし同時に、このような日本の不安定さこそ、近代以降、日本が幾度も経た振幅の激しさを支えた根源的エネルギーであったともいえるかもしれません。

事実、近代史においてかくも振幅の激しかった国があったでしょうか。

極東の小さな島国に過ぎなかった日本が、国土も狭く小さく、天然資源にも欠けた東洋の一国が、半世紀も経たぬ間に「世界五大強国」の一国として名を連ねた軌跡は、まことに著しいものがありました。さらにその後、半世紀も経たぬ間に日本は敗戦を迎え、廃墟と化した。だが、焦土と化した敗戦から日本は二十年弱で高度経済成長を迎え、米国に次ぐ、もしくは米国さえもしのぎうる経済大国となった。日本の振幅の激しさは、近代のみならず戦後日本にもいえることでした。

約一世紀のあいだに、そのような振幅の激しさに、果たして誰が安定を見出しえたでしょうか。歴史的な振幅の激しさは、必ずしもその心性に直結したものとはい切れません。しかし、人々の心性が、まぎれもなくその歴史的過程によって形成されてきたことを考えれば、近代日本の歩んできた振幅の激しさは、近代日本の心性の系譜そのものを指し示しているといっても過言ではないでしょう。

振幅の激しさに安定があるはずがありません。

せん。不安とは、振幅の激しさゆえに生じるものであり、両者はともに、そして常に不可分な性質にあります。そして、その葛藤こそが近代日本を支えたもつとも強い根源的エネルギーとなったとするならば、かくも激しい振幅の歴史的過程をたどってきた近代日本の光と影をめぐる一端が浮き彫りになるのではないのでしょうか。

なぜなら振幅の激しさとは、いずれの方向に向かおうとも、つねに膨大なエネルギーを要するからであり、両極端な明暗には、それだけいずれも同等の原動力があることを示しているからです。

かくも振幅の激しい歴史的過程を経て、劣等感と優越感という振り子の狭間を激しく行き来し続ける心性の系譜を歩み続けた道のは、常に不安から逃れられることはありません。存在しえないように、両者は決して離れることのない、不可分な、常に表裏一体に続ける、いわば日本の絶対値を指し示すものでもあるからです。近代日本の振幅の激しさも、その心性に刻まれた不安も、光の強さに照らされた影の深さの一端を指し示すものだったかもしれません。

## 「肌色」の憂鬱

最後に、近代日本エリート層にとっての人

種体験とは、それすなわち近代を問うことになったと私は考えます。その系譜は、近代日本が「一等国」の道を歩み始めたとき露戦争後も、「世界五大強国」の一国としてひとつの頂点を迎えたともされる二十世紀初頭も、そして日本全土が焦土と化した敗戦・占領期にも、さらにはその後の経済大国と化していく戦後を通じて一貫してエリート層の人的自己認識にみてとれることでした。

本書で扱った明治から戦後のエリート層の人種体験の系譜から読み取れることは、近代日本エリート層は、肌の色をめぐる苦悩を問おうとしながら、近代をめぐる苦悩を問おうとしていました。なぜなら、日本にとって近代を論じるといことは、ほかならぬ非西洋・日本の「西洋化」をめぐる自己矛盾を論じることの意味したからです。

「肌の色」、そこに潜む「憂鬱」は明治以降、常にエリートたちについて離れぬ影のようにつきまとっていた。「肌の色」はどんなに努力をしても、逃れることも変えることもできない。肌の色」という「憂鬱」は、近代日本が自己に見据えた影であり、現実でした。言い換えれば、「憂鬱」に映った「肌の色」、その「憂鬱」こそが、西洋に自己の承認を求めたために遭遇した、自己矛盾の果てにあった日本のもうひとつの姿でした。日本を棄てられぬまま西洋に承認を求めた日

本。いや、日本を棄てようとも、棄てきれないがために、生じた「憂鬱」という拭いきれないジレンマ。エリートたちの「肌の色」という人種体験は、日本が日本であるために自ら歩み選択した「西洋化」という運命の自己矛盾を露呈することとなった。すなわち「憂鬱」とは近代日本の運命そのものを物語る系譜だったのである。

その後、「肌色」とは、日本人の人種意識を投影するかなような響きをもって浸透していききました。いうまでもなく、「肌色」という概念は、同質性の極めて高い日本社会ゆえに生まれ浸透した言葉にほかならない。単一民族神話の反映ともいえるでしょう。しかし、クレヨンや色鉛筆など文具における色の正式名称から「はだいろ」が消えたのは、二〇〇〇年以降のことです。

しかし、「はだいろ」が日本社会に浸透し、支持されたのは、単にそれだけではなかったでしょう。なぜなら「肌色」とは、黄色でも白色でもない、実に境界不明瞭で曖昧な概念であり、人種的差異の宿命性や、それまで日本が抱え続けてきた人種の自己矛盾を忘れさせるかのような響きをもち、それをひとびとが意識・無意識的に支持したであろう一面をも物語っているからです。「はだいろ」は変えようもないことは誰もが認識している現実であるからこそ、近現代日本の自尊心に関わ

るがゆえのある種のタブーでもあり続けた。このおぼろげで曖昧な日本人の人種意識は、その希薄さを示すものではありません。この言いやうもない、しかし根深く根強く社会や人々の意識に浸透している憂鬱こそ、近代以降、日本の心性にありつづけた日本人の人種意識の本質を示している。

その点で、その憂鬱は完全に消えてはいない。近代日本の光と影はいまもなお、せつないままで、「肌色」の憂鬱となつて、日本の心性にあり続けているといえます。

#### 終わりにかえて..

#### 自己否定を伴わないグローバル化を

以上が、拙著を通じて私が世に問うた概要であります。ここまでお読みいただければ、なぜ本講演に「自己否定を伴わないグローバル化を」『肌色』の憂鬱をめぐる終焉と日本人の精神構造」というタイトルをつけたかお分かりいただけるかと思えます。このタイトルは、拙著を発売した現代的意味につながります。

まず、今いわゆるグローバル化が叫ばれて久しいですが、近現代日本の時間軸で捉えれば、現在は「三度目の明治」といえるでしょう。これまで論じましたように、近代日本のパラダイムは自己否定と不可分にありましたが、それは今グローバル化が唱えられて

いる現代にも充分に見受けられます。すなわち、昨今の英語偏重教育もその一つといえますが、いまだに「グローバル化」するには日本人であることをどこか否定しなければならぬと考えている。この点に関しては、拙論「天皇・マッカーサー写真の衝撃」半藤一利ほか編『大人のための昭和史入門』（文春新書、二〇一五年）に詳細を記したのでご覧いただければと思います。近代の西洋化、戦後の国際化、現代のグローバル化は、いずれも自己肯定のための自己否定という近代日本のパラダイムから何も原型が変わっていません。その一連の在邸に漠然とした自己否定がつきまとうのも、いずれもあの鹿鳴館のせつなさから脱却してはいないからです。

もう日本は、自己否定を伴わないグローバル化を模索する時期にあるのではないでしょう。それは「日本は凄い」ということではありません。「凄い」とも「ダメだ」とも言わずにすむ心性の構築です。なぜなら、「凄い」も「ダメだ」も結局は、こころの空虚を埋める不安定な振り子に過ぎないからです。

言い換えれば、日本が近代のパラダイムであり続けた自己否定から脱却できるときに、真のグローバル化への第一歩なのかもしれません。

次に、「肌色」の憂鬱をめぐる終焉です。拙著では「肌色」の憂鬱を論じましたが、そ

のような著作が一冊の本として世に出たということは、ある意味で、その終焉の時代を迎えたといえるのではないかと著者として考えています。二〇一四年の夏に出版させていたでいて以来、様々な先生から、これまで誰もが触れたがらなかったタブーの深層と本質を『えぐった』作品とお言葉をいただきましたが、私はむしろ、もはやこの『肌色』の憂鬱は、一つの終焉を迎えたからこそ、著作として世に出たことに重要な意味があると主張したいと思っています。その点で、これからが本当の意味で、日本が日本としてグローバル化に向き合っていく時代を精神的にも迎えたのではないかと私は考えています。

最後に、拙著は、これまで断片的に扱われてきたテーマを通史として扱ったという点では初めての試みではなかったかと認識しております。本書は私にとりまして一作目の書下ろし単著となりますが、明治から戦後の日本人の人種体験とその心性の系譜から日本人の精神構造を解き明かすことを目的としました。そのうえで、現在取り掛かっております二作目は、同じ日本人の精神構造を、まったく別の視座から解き明かす試みと共に進めております。その点で、拙著をこのようにご評価いただけましたことは、私にとりまして大変励みになりました。改めまして心から深く感謝申し上げますとともに、今後とも何卒御指導

御助言のほどよろしくお願いいたします。御清聴、誠にありがとうございました。

#### 〈主な参考文献〉

眞嶋亜有『肌色』の憂鬱―近代日本の人種体験』中公叢書、二〇一四年  
眞嶋亜有「天皇・マッカーサー写真の衝撃」半藤一利・船橋洋一・出口治明・水野和夫・佐藤優・保阪正康他『大人のための昭和史入門』文春新書、二〇一五年

※本会報に掲載されている記事内容等の無断転載を禁じます。

#### ◆明大ニュース

##### ●二〇一七年度一般入試

##### 志願者数十一万人超え 三年連続増加

明治大学の二〇一七年度入学試験は、三月三日に出願締切となる「大学入試センター試験利用入試（後期日程）」など一部を除き試験日程を終えた。特別・推薦入試を除く一般入試の志願者数は二月九日の時点で十一万二千九百七人。五年ぶりに十一万人の大台に達し、十一年連続で十万人を超えるとともに、三年連続で前年を上回った。昨年に引き続き、Web出願を実施したほか、科目選択方式の変更などが要因とみられる。

入試種別ごとの志願者数では、各学部が

実施する「一般選抜入試」が前年度比〇・七%増の六万七百人。商学部、経営学部、情報コミュニケーション学部、国際日本学部、総合数理学部で志願者数を増やした。

一回の受験で複数学部への出願が可能な「全学部統一入試」は二月五日、大学三キャンパス（駿河台・和泉・生田）と全国六都市（札幌・仙台・名古屋・大阪・広島・福岡）の会場で実施。十学部中八学部で志願者数を伸ばし、前年度比九・九%増の一万九千七百四十人となった。特に政治経済学部では前年の二倍以上（二千七百七十三人）の出願数を記録した。

センター試験の現役志願率が過去最高を更新した「大学入試センター試験利用入試（前期日程）」の志願者数は、前年度比九・二%増の三万二千四百六十六人。後期日程は三月三日まで、商、理工（機械工学科を除く）、総合数理の三学部で出願をそれぞれ受け付けた。

主要私立大学で、志願者数が最終的に十万人を超えるのは明治大学のほか、近畿大学、法政大学、早稲田大学、日本大学の計五校となる見込みで、本学の最終志願者数は三月上旬～中旬に確定する。

##### ●明治大学発祥の地・記念碑祭を開催

明治大学校友会東京都南部支部は、一月

二十二日、本学発祥の地である東京・有楽町近くで「明治大学発祥の地・記念碑祭」を開催。柳谷孝理理事長、土屋恵一郎学長、向殿政男校友会会長をはじめ大学役員、校友ら約百人が列席した。これは、明治大学の開学の起源に触れて、母校のますますの発展を祈念する行事として開催されているもので、今年で八回目となる。

第一部では、文学部兼任講師で大学史料センター研究調査員の長沼秀明氏が「矢代操に見る大学教育の原点」と題して講演した。長沼氏は、明治維新の最中、明治法律学校の設立にどのように関わっていったか等矢代操の役割についてわかりやすく解説。また、「明治法律学校設立ノ趣旨」の史料をひもとき、「権利自由」「同心協力」等謳われる言葉の背景を紹介した。

第二部の懇親会では、まず柳谷理事長が登壇し、今日に至るまでの発展に触れ「今後も甘んじることなく、建学の精神に基づき全力で邁進していきたい」とあいさつ。続いて、土屋学長は若き三人の創立者らに思いをはせながら「常に新しい大学の創造に向けて力を注いでいきたい」と抱負を述べた。さらに、記念碑の設置にも携わった千代田区の石川雅己区長、岸本辰雄の曾孫に当たる岸本幸雄氏があいさつし、乾杯は向殿校友会会長が務めた。和やかな雰囲気の中、出席者による歓談

や、学生サークルによるジャズ演奏、「第五十三回明治大学全国校友沖繩大会」のPR等が行われると、最後は全員で肩を組み、高らかに校歌を斉唱した。

#### ●理工・黒田教授が警備ロボットを開発 明大発ベンチャーが実用化を目指す

理工学部の黒田洋司教授と明大発ベンチャー企業のシークセンス株式会社が開発した、セキュリティロボット「SQ-1」の実用化に向けた動きが活発になっている。

開発されたロボットは、独自のレーザーセンサー技術（特許出願中）で固定カメラでは追えない不審者・不審物の発見と通報、追跡などを行うことができる。さらに、高度な人工知能（AI）機能と連動することで不審な行動や振る舞いを検知し、事故を未然に防ぐことができる能力を搭載している。このロボットシステムは黒田教授の下で、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の支援を一部で受けながら開発され、生田キャンパス・地域産学連携研究センター内で設立されたベンチャー企業・シークセンスが実用化を目指している。

こうしたロボット開発の背景には、警備業界の人手不足が大きく関係しており、近年では人間に頼るだけでなく、最新技術を駆使したセキュリティ対策が進められている。

警備にロボットを活用することで、人間の負担減はもちろん、低コストで二十四時間体制の監視業務が可能になるなどメリットも大きく、業界からの期待も高い。当面は、実用化に向けた開発が本格的に行われる予定だが、将来的には、道案内や配達など警備以外のさまざまな場面での応用も想定されている。

#### ●臨床心理士資格試験 明大から七人が合格 高い合格率で修了生の九九%が資格取得

二〇一六年度の臨床心理士資格認定試験の結果が発表された。明治大学からは大学院文学研究科臨床人間学専攻臨床心理学専修の修了者七人が合格。今年度も高い合格率となった。臨床心理士資格は、公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会が指定した大学院修士課程を修了後、同協会が年一回、秋に実施する試験に合格した者に与えられる。本学は養成大学院の指定を受けており、合格率の全国平均が六十%前後の中、毎年八〇〜一〇〇%の合格率を維持。今年度も八八%と高い水準となった。

今回の合格者を含め同専修では、修了生の九九%にあたる八十八人が資格を取得。臨床心理士として医療機関や教育相談所、スクールカウンセラーなど現場で活躍している。

一月二十八日、合格祝賀会を駿河台キャンパス・グローバルラウンジで開催。小林正



美副学長（総合政策担当）、石川日出志文学部長、野田学文学研究科長をはじめ、大学関係者、OB・OGによって組織される明大臨床心理士会会員、大学院生が多数列席し、合格者を祝した。

小林副学長は、「これからの社会において臨床心理士の役割はさらに大きくなる。今後の活躍を期待したい」と祝辞を述べた。続いて、明大臨床心理士会の宮尾亮子幹事は、「我々の仕事は人の一番苦しいところに寄り添う仕事。これからは仲間として支えあい、自分自身もケアしながら頑張ろう」とエールを送った。

### ●秋学期「交換留学生修了式」

#### 留学生九十一人が明大での学びを終える

明治大学での交換留学プログラムを秋学期で修了する九十一人の外国人留学生の「交換留学生修了式」が一月三十日、駿河台キャンパス・グローバルフロントで行われ、一学期間または一学年間の留学を終える留学生らが出席した。この交換留学プログラムは、明治大学と海外の大学間または学部・研究科間の協定に基づくもので、協定校の数は、三八カ国カ・地域二百十大学（二〇一六年十二月現在）に広がっている。

冒頭、小室輝久国際教育センター長は「二つのお願い」として祝辞を述べ、「修了後も、

みなさんは常に明治の一員であることを忘れないでほしい。世界中に五十万人以上いる明治の卒業生を頼り、また同時にみなさんには明治の仲間を助けてもらえれば」と語った。さらに、「大学のモットーは『権利自由』『独立自治』。最近では、世界的には内向き・排外的な志向の高まりもみられるが、人々が行き交う社会では、皆さんのように互いの権利や自由を尊重し、ぜひ多様性を大切にしてほしい」とエールを送った。

修了証の授与は、オーストラリア・ニューサウスウェールズ大学からの留学生リョウ・ジェシカさん（文学部）が代表を務め、日本語・英語両方のスピーチで半年間の留学の思い出を語った。また式の中では、明治大学の国際化および留学生を支援している当会の田村駿会長から、全員に記念品が贈られた。

修了生の一人、イタリア・ヴェネツィア大学からの留学生ムツイ・アレックスサンドロ（商学研究科）さんは「理論経済学などを日本の大学で学ぶことができたのに加え、日本語教育センターの日本語授業を週三日受講し、十二月の日本語能力試験ではN1（最上級）に合格できたことはとても良かった」と笑顔で振り返っていた。

### ●OB社長

▽イトーヨーカ堂（小売業） 〓三枝富博氏

（一九七三年法学部卒・六十七歳）

▽オンワード樫山（繊維製品） 〓大澤道雄氏  
（一九七八年商学部卒・六十一歳）

▽ユニテッド・スーパーマーケット・ホルディングス（小売業） 〓藤田元宏氏（一九七八年政経学部卒・六十一歳）

▽日清食品チルド（食品製造） 〓伊地知稔彦氏（一九八三年農学部卒・五十六歳、四月一日就任予定）

### ●「学生U・イターン就職促進協定」を締結

#### 地方への就職を支援

明治大学はこのたび、複数の地方自治体と「学生U・イターン就職促進に関する協定」を締結することを決定した。

同協定を締結するのは、秋田県、山形県、福島県、石川県、山口県、香川県の六県。当該地域の出身者やその地域への就職に関心のある学生に対し、企業情報・生活情報等を提供するなど就職活動を支援することにより、就職先の選択の幅を広げることを目的として締結される。

二〇一五年度には栃木県、長野県、長崎県とも締結するなど、就職キャリア支援センターではこれまで、学生のU・イターン就職を支援する取り組みを行ってきた。今回の協定締結を受け、さらに強化していく方針。各地域との締結式は順次行われ、今後も協定地

域をさらに広げていく。

二月十日、駿河台キャンパス・グローバルフロントにて、明治大学と福島県の「学生U・Iターン就職促進に関する協定」の締結式を行った。土屋恵一郎学長ほか関係者と、福島県から鈴木正晃副知事らが出席した。

土屋学長は「Uターンはもちろん、県外出身者も福島で働きたいと思うようにさまざまな取り組みを行っていききたい」とあいさつ。鈴木副知事は「福島県は、再生可能エネルギーやロボット関連産業など、未来を開く産業の育成に努めている。明大生に福島の未来をつくっていただきたい」と述べた。

#### ●「現代日本社会を

##### 『戦後七十年』から考える』を開催

NHKが作成したドキュメンタリー映像を用いたアクティブラーニングプログラム「現代日本社会を『戦後七十年』から考える」が一月十九日～二十三日、和泉キャンパス・和泉図書館ホールで開催された。

同プログラムは、教育開発・支援センターが初年次教育の一環として二〇一三年度から開始し、今年度が最終年度。現代日本社会が直面している諸課題を「戦後七十年」という時間軸から取り上げ、番組を上映し、平成生まれの学生が「触れ」、これらの課題を「知り」、番組制作者と学生との対話を通じて

「考える」機会を提供するもの。「制作者」と「視聴者」の直接的なキャッチボールを行いながら、映像を読み解く視点を養うことも目的に企画された。

今回は、アジア・太平洋戦争をめぐる近隣諸国との対立、沖縄の基地問題、戦後日本における女性など五作品を上演。延べ二百十人の学部生・大学院生が参加した。「靖国神社の成り立ちが分かった」「沖縄の基地問題に関心が湧いた」など、率直な感想が寄せられる一方、「複雑な問題が多く、これから図書館で本を探したい」といった、次へのステップに向けた声も聞こえた。

#### ●和泉図書館 来館者四百万人突破

##### 表彰状を授与

和泉図書館は一月三十一日、来館者数が四百万人を突破したことを記念し、同図書館にて記念の表彰状の授与を行った。対象となったのは四百万人目とその前後の学生。入館してすぐに呼び止められた三人は驚きながらも、笑顔で表彰状を受け取った。

四百万人目の来館者としてゲートをくぐったのは、TOEICの試験勉強のために訪れた荒木遙さん（文1）。「図書館にはほぼ毎日通っている。色々な図書館を利用するが、和泉図書館が一番使いやすく、過ごしやすい。大好きな図書館の四百万人目でも

嬉しい」と喜びを語った。

「人と人、人と情報を結ぶ『架け橋（リエゾン）』」をコンセプトに二〇一二年五月にオープンした和泉図書館。開館から四年八ヶ月を迎え、和泉の学生生活に浸透している様子が見えかけた。

#### ●「スポーツ功労団体」として表彰

##### リオ五輪メダリストの丹羽選手を支援

明治大学はこのほど、スポーツ功労団体として文部科学大臣から表彰された。一月十七日に東京都内で行われた表彰式に越川芳明副学長（学務担当）が出席し、松野博一文部科学大臣から表彰状を授与された。

スポーツ功労団体表彰は、オリンピックなど世界的規模のスポーツ競技会において優れた成果を挙げた選手のスポーツ活動に対し、継続的な支援を行い、国際競技力の向上に寄与した団体を表彰するもの。今回はリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックメダリストのスポーツ活動に継続的な支援を行った三十四団体が表彰され、明治大学は史上初の団体銀メダル獲得に貢献した男子卓球の丹羽孝希選手（政経4）に対して、継続的な支援を行ってきたことが評価された。

表彰式でありさつに立った松野大臣は、継続的な選手の支援に対し感謝の意を述べるとともに、「次は東京大会。開催国として大会

の成功はもちろん、スポーツの力、素晴らしさを全世界に発信していきたい」と語り、より一層の協力を呼びかけた。

### ●校友の星野仙一氏、

故・郷司裕氏が野球殿堂入り

明大関係者からの選出は二十三人に

二〇一七年の野球殿堂入り記者発表が一月十六日、公益財団法人野球殿堂博物館（東京都文京区）で行われ、競技者表彰のエキスパート部門で星野仙一氏（一九六九年政経卒）、特別表彰で故・郷司裕氏（一九五四年商卒）が選出された。今回の選出で明治大学関係者の殿堂入りは通算二十三人となった。

星野氏は明治大学入学後、体育会硬式野球部のエースとして東京六大学野球などで活躍。一九六八年にドラフト一位で中日に入団後は、闘志あふれる投球で七四年のリーグ優勝に大きく貢献し沢村賞を受賞した。現役引退後は、中日の監督として、八八年、九九年と二度のリーグ優勝。二〇〇三年には阪神でリーグ優勝に輝き、一三年には創設九年目の楽天を初の日本一に導いた。

郷司氏は明治高校在学中に、当時高校野球部の監督だった島岡吉郎氏から審判員になることを勧められ、以後、高校、大学、社会人野球において多くの試合で審判を務めた。一九六四年から全国高等学校野球選手権大会

の審判員となり、春・夏の甲子園で計三十一回決勝戦の審判員を務めるなど、アマチュア野球の発展に貢献した。

多くの報道関係者らが集まった記者発表では、同博物館の熊崎勝彦理事長（日本プロ野球組織コミッショナー、一九六五年法卒）から星野氏と、郷司氏の次男・信之氏に殿堂入り通知書が授与された。星野氏は「率いた三球団とも最下位のチームだったが、選手たちのおかげで優勝することができた。少年野球からプロ野球まで野球界が一丸となっていくことを後押ししたい」と話し、信之氏は「全国の野球を愛してやまないファンの方々のおかげで今回殿堂入りすることができた。きっと父も天国で喜んでいる」と語った。

### ●明大出身力士・武政 三段目優勝を報告

大相撲一月場所所で三段目優勝（七戦全勝）を飾った、阿武松（おうのまつ）部屋（たけまさ、二〇一六年政経卒、体育会相撲部出身）が二月十六日、駿河台キャンパスを訪れ、柳谷孝理理事長、土屋恵一郎学長に優勝を報告した。

百七十cm、百八kgと小柄な体格を生かし、低く鋭い立ち合いが持ち味の武政。同席した阿武松親方が「調子がいいと先輩力士もてんてこ舞いにするほど。体格を生かした瞬発力のある相撲を磨いてほしい」と期待を示す

と、武政は「これまでどおり、一番、一番集中して昇っていききたい」と、幕下となる来場所に向けて意気込みを語った。

### ◆駿台トピックス

#### ●新入会員歓迎会で参加者が大いに交流

恒例の新入会員歓迎会が二月十六日午後六時半から、過去二年間に入会された会員の中で、昨年この会に参加できなかった方を除いた十三人の参加のもと開催されました。

河村博総務・事業委員長の司会で、まず田村駿会長が「さらなる明治大学ネットワーク構築のためにも会の活動になお一層のご理解を」と歓迎の挨拶を行い、上西紘治専務理事が会の概況を説明して、乾杯の音頭をとりました。このあと会食をまじえながら、運営委員会を構成する各委員長がそれぞれの活動方針や現況を報告しました。

そして、新入会員の方々には自己紹介も兼ねて、母校の思い出や仕事の話まで、それぞれ持ち味もたっぷりな楽しいスピーチを披露していただきました。せっかく入会してくださっても、卒業してから母校を訪れるのは初めてという人もおられるなど、ご都合上、例会などにもなかなか参加がままならない方も少なくなく、名刺交換しながら親しく交歓して、絶好の相互理解の場となったようです。盛り上がったところで河村委員長の音頭で関

東一本締めして、今年で創立十五周年を迎える会のためにも、連携や母校への支援などで力を合わせていくことを約しました。

なお、新入会員参加者は以下の方々です。

小山哲郎、羽生健一郎、草木頼幸、小林稔、常泉邦彦、飯田和人、鳥居伸年、深代尚夫、上野雅史、尾暮敏範、中里猛志、宮坂寿彦、米山明広

(敬称略)



### ◆駿台懇話会出席者

#### ○明治大学ご招待者

柳谷孝、土屋恵一郎、中村義幸、大田原健司、荒川利治、大木宰子、清水秀夫、浜本牧子、吉田悦志、小川知之、三林宏、石川日出志、横田雅弘、砂田利一、中林真理子、板垣ふみ子、笠松浩義、鈴木一弘、小野寺幸子、小瀬川響子、飯塚浩司、眞嶋亜有、金ゼンマ、五十嵐悠紀、野村清、荒川薫、山田道郎、今井勝、桑田茂、張競、山崎健司 (敬称略)

#### ○会員出席者

青木孝、青木幹則、青柳勝栄、秋山隆敬、坪昭二、浅井宏、安達明正、有賀隆治、飯田和人、石川かおり、石橋良一、市川治彦、同ご友人、伊原敏雄、岩田守弘、植木榮、上西紘治、宇川一夫、大槻哲也、大野正美、大原幸男、大前実之、大村託現、大山卓良、尾暮敏範、栢森靖、河村博、北林幹生、木村健一、杳掛英二、小島清治、小山修、齋藤柳光、坂田英夫、笹田学、佐藤和正、杉浦伸二、鈴木紘一、鈴木隆志、関孝夫、関根均、

同ご友人、高澤徹、高橋郁夫、竹下衛司、田代恭一(代理)、田村駿、常泉邦彦、当山明彦、徳丸平太郎、富水流孝二、中川敏洋、長堀守弘、西山武夫、二宮充子、長谷川進一、塙英幸、馬場範夫、原田榮、平川清、深代尚夫、同ご友人、福田和彦、前川一郎、摩尼和夫、三浦栄治、水江博、同ご友人、宮坂寿彦、向井眞一、村岡健、室井恵明、森一朗、山上雅隆、山口大介、山口政廣、山田朝彦、山田勝、弓野理恵

#### 【編集後記】

いまだ寒い日が続いておりますが、皇居の周りにある桜の蕾も膨らみ、梅の花も咲き始めました。また時折暖かな日が来ますと、そろそろ春の訪れを感じます。会員の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか？

昨年、明治大学の校友で、建築家の中村拓志さんが設計された「狭山の森礼拝堂」が、十カ国の加盟するアジア建築家評議会が毎年優れた建築を表彰する「アルカシア建築賞」の二〇一六年最高賞を受賞されました。そのお祝いの会が今年二月盛大に行われました。

中村拓志さんと私は学部が異なりますが、同じ平成九年に卒業しました。中村さんは大学院へ進み、卒業後は隈研吾さんという著名な建築家のもとで修行されました。その頃からお付き合いが始まりました。

だが、その後独立されて、今や三十人を超える所員を抱えられ、日本を代表する若手建築家の一人に名を連ねています。今回の受賞作品である狭山湖畔霊園にあります「狭山の森礼拝堂」を以前見学させていただきましたが、手の平を合わせた特徴的な屋根になっており、とても心が落ち着く神聖なものを感じました。皆様も一度足をお運びいただければと思います。中村さんのサクセスストーリーを間近で見えてきた者として、今回の受賞は我が事のようにうれしく思いました。しかしそれも中村さんにとっては通過点なのかもしれません。同世代である中村さんの今後の飛躍を楽しみにしつつ、中村さんから活力を得て、私もさらに仕事に邁進したいと思いました。

この時期、花粉でお辛い方も多いかと存じます。季節の変わり目ですのでどうかお体には十分お気を付けてくださいませ。会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

(相臺志浩)